

【第9回松本市基幹博物館建設検討委員会展示専門部会 発言録】

(敬称略)

開催日時 令和元年7月31日(水)午後4時00分から午後5時30分まで

場 所 松本市立博物館2階講堂

出席者 松本市基幹博物館建設検討委員会展示専門部会

菊池健策委員、後藤芳孝専門員、笹本正治委員、関悟志専門員
事務局(松本市立博物館)

木下館長、中原課長、三木係長、赤羽主査、千賀主任、堀井主任、
岡野囑託

1 部会長あいさつ

菊池：暑い中ご苦労さまでございます。これまで色んな議論を重ねてまいりましたけれども第9回の展示専門部会となりました。これまでの議論の成果として実施設計がまとまったということで展示専門部会としては今日が最後の会となろうかと思えます。これまで議論を重ねてまいりましたけれども更なるご意見があらうかと思えますので、今日のうちにご意見を聞かせていただければと思えます。よろしく願いいたします。

2 議題(1)

事務局：(展示設計の完了報告についての説明)

菊池：はい、ご苦労さまでした。ただいまご説明いただきましたが、これにつきましてご質問ありましたらよろしく願いいたします。

笹本：大きく変わったものの1つが手まりだと思えますが、本物の手まりは色あせはないんですか。ああいうものは古くなったら白っぽくなったりして見栄えが悪くなったりすると思うんですが、どれくらい持つんですか。

事務局：日光が入ってくる吹抜けの空間ですので考えていかなければならないんですが、いま情報としてどのくらいで劣化するのかというところまでは申しわけありませんが把握できておりません。

笹本：いまの話のとおり、今回このところが一番大きく変わっていると思うんですけど、逆に色あせしたりするともものすごくみすぼらしくなるので、その辺はどうしたらいいかお考えいただいた方がいいと思えます。

事務局：はい。1つの考えとしては今回の展示製作の中でも製作会社の方に依頼として含めているんですが、市民の方々にも入っていただきながらワークショップの形で製作していくというのを考えています。そういった取り組みを展示製作のタイミングだけで終えるのではなくて、博物館の方でもできるようにして、例えば、継続的に作ってどんどんと入れ替えていくということも含めて考えていくべきかと思っています。

菊 地：それにしても実物の手まりが劣化したときに入れ替えていくのは誰がやってもできるのかという問題が出てきますよね。バトンに付けるのは学芸員や市民でもできるのかというのは確認はまだですよね。

事務局：バトンの付け方としてはワイヤーにフックという形で考えています。

事務局：ベルトで上下するような構造を採用しておりますので、特に高所作業車だとか足場をつくらなくても入れ替えはできるように建築の方で造作を考えております。

菊 地：はい、わかりました。

後 藤：実物の手まりが下がるということは、照明でなくなるということですか。

事務局：はい。

後 藤：最初は照明ということだったんじゃないですか。明るさは大丈夫ですか。

事務局：すみません、説明が不足しておりました。このバトンにスポットライトを付けられる照明器具を設置する予定です。手まりについてそのスポットから照らし上げるという形で、それが間接的に空間の光源になっていくということで予定しております。

後 藤：紐が下がって手まりがぶら下がるということですよ。風が吹けば揺れるけど大丈夫？

事務局：そんなに風が吹く場所ではないです。空調は床吹き出しですので、その部分に直接風が当たるということはないです。

菊 地：ただ、内照式と外から照らすのでは見た目はだいぶ変わりますね。

事務局：当初の計画ではもともと何もなかった状態で明るさ的には担保されていたところに、一応内照式のものを付けるということで計画を進めておりましたので、明るさ自体は手まりの照明がなくなっても問題はないと考えております。

菊 地：他にございますか。

笹 本：市の体制を知りたいんですけども、松本市の場合は学芸員が次々と入れ替わってしまうということがありまして、先に飯田市の美術博物館を観に行ってきました。美博は非常に安い金額でリニューアルしたそうです。その最大の理由は学芸員が変わっていないので、学芸員たちが地域と密接な関係を持っていると。歴史館で何かやろうとするときには、どうしても業者に頼みますがものすごく高いです。

ところが、美博の場合にはすべて地域の職人さんを上手く利用しながら必要な部分だけをやっていくという作業をしているんです。それができるというのは、逆にいうと学芸員の継続性と関わっていて、歴史館のようにどんどん変わっていくのと違うところの良さがあると思うんですけども、松本市はこれからどうするつもりなのか見えないです。どこへ行っても次々に学芸員さんが変わってしまった結果として、出来上がったあとに誰が責任を取るのか、どういう風に積み重ねていく

のかが見えないので、そこのところだけはっきりさせていただきたいと思います。というのは、作り上げた段階から、周りからはあそこがいいとか悪いという情報が入ってくる。それは永久に続くわけで、その積み重ねの中で学芸員が何をしていくのかということがとても大切になるはずなんですけれども、そのためには継続性のある学芸員をどれだけ揃えられるのかということが問題になってくると思いますので、できたらその辺を市の方に伝えていただけたら幸いです。

中 原：松本市の場合も県とは変わらない状態だと思います。いま先生からお話があったことを担当の方へ伝えて、そのような形で運営をしていきたいという風に考えております。

菊 地：他にご意見ありますでしょうか。

後 藤：TE08に多言語化の関係が出ていますけれども、その辺り基本的にどのように考えているのでしょうか。英語ベースでいくのか他のところまで入れるのか、どのように考えているのでしょうか。

事務局：まず、ベースは解説パネルの中で併記するのは日本語と英語の2つでいま進めています。多言語として広めていく方針としては、中国語の中で繁体字・簡体字と韓国語の展開を予定していますがベースとしては英語です。施設案内パンフレットについては更にいま博物館の状況として、フランス語とタイ語を導入していますので、それは施設案内パンフレットの段階では日本語を入れて全部で7か国語を用意しています。

それから、中簡・中繁・韓の展開については今回の中で英語をベースにクリエイティブ・コピー・ライティング、これを要約しますと「日本文化の素地がない方にいかに理解をしていただくか」というものになっています。これができると、例えば、ここから中国語への展開ですとかそうしたところに発展しやすいですので、今回はまず英語を作ってそこからの展開として中簡・中繁・韓への展開を考えています。

それらの展開については、この展示製作の中には入っていませんが資料管理システムの中で音声ガイドができるシステムが付随していますのでそこへの入力というのでカバーしていければと考えています。

後 藤：市全体で多言語化をどういう風に考えるのかということに関わってくると思うんですけど、お城の方ではいま言った中ではドイツ語も入っていたと思うんですけど、そういう共通性はとっておいた方がいいんじゃないのかという気がします。

それから、ネイティブの人たちに見てもらおうということは、資料をそのまま訳すのではなくて分かるようにという考え方はとても大切だと思うのですが手間がかかるので、その辺のところをかなり早くに日本語ができないとそれが難しいというのがあるので、その辺のところも笹本さんが言われたことに関係するんですけれども、スタッフが大丈夫なの

かということが気になります。

笹 本：いまの話はとても大事だと思うんです。同時に教えていただきたいのですが、松本市は全国で最初に文化財の活用大綱ができていないのに工事を進めていますよね。博物館は文化財活用の中でどのような位置を示していて、あの中には多言語を進めるだとか保存の問題だったり色々な要素が入っていますよね。その最先端に博物館がくるわけです。ですから、作った今後の見通し等がこれからどういう風に交わっていくのかを説明していただきたいです。

木 下：まず、博物館が今回の計画の中でどれだけ汎用されているのかということ「ほとんど汎用されていない」でいいですよ。松本市立博物館の分館は文化財というところがあるので、その文化財の保存活用になっている分館については範疇に入っているんで、個々の保存活用計画を作りましょうということはありませんけれども、実はそれ以上のところは今回のアクションプランの中にほとんど反映されていないというのが現状です。

笹 本：逆にいうと、私の意識としては博物館が一番文化財を持っている。それで、この場合さっきの多言語のことを含めていうと世界に開かれた観光の拠点にしようとしているときに、市の方針がどうであるのかということと交わらなかつたら結局勝手にいってしまう。外側から感じている感じでいうと、博物館と埋蔵文化財とお城がそれぞれ勝手にやっていて関連性がほとんどないように見えるところがあるんだけど、いまの部分って本当はこれからとしては大事になってくるので繋げておかないと市民への説明が弱くなると思いますので、少しお考えいただいた方がいいと思います。

菊 地：これから先間違いなく問題になってくる部分だと思いますので、これから先も含めて調整を計って欲しいと思います。

木 下：歴史文化基本構想の策定から入っていてということで、まずは指定されていない文化財をどうするかということが一番大きく考えていて、それが国の政策で指導の仕方が少し変わってきたというところがあって、いまみたいな博物館をどうしようかということは、一番元にはそのことを対象にしていなかった部分があります。

そうは言っても松本市として文化財の保存活用のマスタープランとして歴史文化基本構想を作ったということであれば、そこにきちんと反映していなければいけないということです。特に歴史文化基本構想の方に関してはマスタープランとして策定をしているので一定の時期で見直しをして、そういう部分を反映していかなければいけないという必要性は感じています。アクションプランの方に関しては10年プランですので始まったら次の修正をかけていくつもりになっていかなければいけないと思っています。

- 菊 地：調整をこれから先もよろしく願いいたします。
- 後 藤：映像関係はあんまり派手に入れていないという話ですけれども、当初は1階にパソコン設置だとかという考え方があったような記憶があるんですけれども今回はそれはまったくないんですか。
- 事務局：検索端末があります。AV05の図面右側の松本データベースというものを設けるといって計画しています。これは博物館に来たお客さまが調べたいことをタッチパネル式の機械を使って検索して調べるといってものになります。
- 後 藤：それは1台ですよ。個人で使えるものもありますか？
- 事務局：このデータベース自体は機械があってタッチパネルでできるということです。
- 後 藤：将来どういう風にAVが変わってくるのか分からないですけど、VRみたいなものはこれからどんどん発展してくるんじゃないのかという気がするんですよ。それを設置しなくてもいいんですけれども、そういったものに対する対応をどうするのかということは見通しておかないといけないので考えておいた方がいいんじゃないのかと思いました。
- それから、ZS10ですが、これは実施設計ということなのでここに展示するものについて細かいことはこれで決まりということですか。
- 事務局：施工の段階で更にいい資料が見つければ差し替えていくことは考えています。ただ、のぞきケースに入れられるとかというケース上の制約はありますがクリアしながら変えていくことはできます。
- 後 藤：いままで大きなところの話し合いは進めてきたので、個々のところについてこれでいいのかというところは、どこの区画についてもやっていないんですよ。以前の話だと個々にうかがってそういうような話を詰めていくというところですけども、お忙しいからそこまで進んでいかないので、細かいところをどうするのか考えておかなければいけないんじゃないかと思います。例えば、ZS10の右側の方に徳川包囲網というパネルがあるんですが、これについては資料をお渡ししておきましたけれども、細かいところの詰めにどうするのかというところだとか。
- それから、例えば、エピローグと書いてあるところの下ですが大きなカゴが入るんですが、カゴの下のスペースが空きますよね。いまはカゴのスペースに展示物を置いてありますけれども、そこは今回はやめて置かないのか置くのかとか、そういうところまで本当は詰めておかないといけないんじゃないのかという気がしているんですが。どういう風に進められるのか教えてもらえればと思います。
- 事務局：今回展示設計をまとめる段階として、この平面図上の配置と立面図上でも資料の大きさを計って模式化してパネル配置も含めて一旦は検討しています。ただ、今後これで展示設計がまとまって先ほどの解説にも関

わるんですが、展示製作の発注がおそらく1年後で製作に入るのが来年10月くらいからという風に考えています。展示製作を進めるにあたってはやはり解説文があって初めてスタートをしていくという風になりますので、この設計が終了してから解説文の作成というのを担当の方へは進めていこうと思っています。その中でやはり資料の見直しですとか、そういったこれを語るためには資料を差し替えたり、追加しなければダメなんじゃないのかということもあると思うので、その作業をこの展示設計で一旦この形がまとまった段階からスタートさせ製作の方に向かっていくということで考えています。なので、1年間の中で更に詰めていくということで考えています。

菊 地：大変な作業だと思いますから、先ほど笹本先生からご意見がありましたけれども人手を確保することも頭に入れて進めてください。

他にございますでしょうか。

後 藤：Z S 4 2です。城下町のジオラマの図面があるんですけども、角は四角いままでですか。

事務局：すみません、そこまでは気が回っていなかったです。施工の段階で隅丸の加工をしていくということは業者にも相談しながら配慮していきたいと思います。

それから、いまご指摘いただいた中で関連してですが全体としての角もそうですし、Z S 4 3の天板の部分の角も含めてどういうことができるのかを施工者と相談していきたいと思います。

後 藤：もう少し滑らかに周れるような形が考えられるなら、むしろその方が周る側としてもいいんじゃないのかなという気がするんですけど。

事務局：R加工というのはその分加工賃もかかってくると思いますのでそうした部分も含めて相談していきたいと思います。

菊 地：簡単なことをうかがいます。Z S 6 0ですが、展示ケースは3 m × 3 m 5 0 c mくらいありますよね。掃除は簡単にできますか。

事務局：今回既存の手すりを解体するにあたって、一旦ガラスケースを外して手すりも取ってクリーニングをします。

菊 地：模型そのものではなくてケースの掃除です。

事務局：ガラスケースの規模はいまあるものとほぼ同じ形になっています。

菊 地：どうやっています？

事務局：モップを伸ばしてそれで天板のガラスを拭いていますので同じようにすることを想定しています。

菊 地：わかりました。他にございますか。

笹 本：子どもたちって想定しないようなことをします。うちのところで言うと、最初にあるナウマンゾウのところをしょっちゅう直しているんですけどいまは周りが触れないようにしています。できあがった段階で子どもた

ちがあそこに抱きついて壊れてしまったこともあります。先ほどの話の中に、ものの角の話があるけれども、逆に登ってみたり思いも掛けないようなことをする子どもが現れる可能性もあるので、我々の視点で当たり前だと思うのではなくて、子どもたちが遊び始めたときに思わぬ行為があり得るはずだと思いますので、その辺を少し考えておいた方がいいだろうと。それは先ほど後藤さんの「角々でいいのか」というお話とも関わってくるのかと思いますけれども。大人にとって当たり前でも子どもにとっては決して当たり前ではないということを前提に少し見ていただけたらと思います。

事務局：ありがとうございます。

菊 地：ぶつかったりすると装置より先に子どもの方が参るわけですね。ですから、扉やガラスの強度よりも人の体の方が持たないわけです。だから、ガラスがあるところ透明ガラスとかそういったところは「ものがあるよ」ということが分かるようにしておいた方がいいかと思います。

これが最後になりますので、他にも何かございましたら。

関：Z S 6 1 のユアオピニオンのところ、来館者の方々のメッセージを記入していただいてフックに掛けるという形は設計のポイントにも挙げられているくらいで大事な部分かとは思いますが、自由に書いていただくのか、「こういったことに対してご意見・メッセージをいただきたい」という風に範囲を絞るのか、その辺はどのようになっているのでしょうか。

実は、山岳博物館でも規模は小さいですが自由に書いていただいているんですけども、そちらでは最後に展示を見ていただいた上で「50年60年後を想定して山とのどんな繋がりや期待を込めますか」というメッセージをお願いしていますが、皆さんほぼ見ていなくて雷鳥についてなど感想文を書いていただいています。それでも十分いいかとは思いますが、ある程度ひと通り展示を見ていただいて感じ取ったものを自分の意見として書いて掛けていただいて、それを他の方々に見ていただくような、最後のメッセージが博物館側から出ればいいと思います。

事務局：いまのご指摘は、まさにその通りでG P 2 4の中にユアオピニオンで書いていただくための実際のフォーマットの紙の図案があります。これをご覧いただくと、「コレコレに関してあなたのご意見を書いてください」というのが特にないので、ご指摘を踏まえ考えなければいけないと思っています。展示設計の業者さんと話している中では、この紙を色違いで刷って「松本城の展示の中でこの資料のこういうところが面白いと思ったということを書いてください」というのが1つの例ですが、そんな感じで考えていました。例えば、松本城が面白いと思った人もいて、山が面白いと思った人もいて、それがちりじりに色が混ざる様子も1つの

展示として見てもらえれば面白いかなということであったんですが、私たちの意図をもう少し発信しなければいけないという風に思うので施工の段階で更に詰めていきたいと思います。

関：あとは管理運用のところになるんですけども、館の方がチェックしてふさわしくないものは取り除くだとか、例えば、同じような意見があればまとめていってグループ分けするだとか、これも展示の一部だと考えるならば、見ていただくところにも配慮をいただければと思います。

事務局：ありがとうございます。Z S 6 1 でしたか、掲示していただくところも少し高さがあるということもあって、いまの想定の利用としては、例えば、投書箱のようなものに入れていただいて館の職員の方で演出的な掛け方も含めてやっていきたいと思っていますので、運用まで考えが至っていないというところが少しありますので詰めていければと思います。

中 原：その辺は誹謗中傷を書かれることも有り得るだろうということと、場所柄外国の方が多いので外国語で書かれていたら何を書いているのかが分からないというような部分が出てくるのかなということは想定して、どのような形でやっていくのかを今後しっかりと詰めていきたいと思っています。

笹 本：作る前ではありますが、作られた時のことを含めていうと、先ほど言いました飯田の美博では映像を全部自分たちで撮っているから次々に替えられるんだと。逆に言うと「学芸員の皆さんは長い間いて欲しい」と先ほど言いましたが、中のメンテナンスをきちんとするためには自分たちで映像を作っていく必要がある。つまり、松本市の方で次の展示も含めて研究時間を確保できて学芸員がある程度しっかりと仕事ができるような形を保障していただければと思います。

菊 地：ありがとうございます。

後 藤：Z S 1 7 の探求の井戸ですけども、体験ワゴンを引っ張り出すと何が出てくるんですか。

事務局：特にこの中に資料を常時入れてあるということではなくて、例えば、「学芸員が介添えの上で今日はこの資料が触れます」というようなことを置くための可動式のテーブルを用意しておくというようなイメージです。

後 藤：名前はいいんですけど、ここが休憩所になりそうな気がするんですけど。ぜひ、この机と椅子を松本家具のような豪華なものにしてお客さんが「松本家具が置いてあったりして松本市はすごいことをやっているな」と言われるくらいに考えた方が、学芸員が立って、例えば「今日はこんなことをやってみましょう」とやるのなら使えるけど、そうでなければ休憩所になってしまうんじゃないのかという気がしますので、そこら辺のところを少し豪華に考えてみたらいかがでしょうか。

菊 地：それでは、そろそろご意見の方もよろしいでしょうか。今日の優先的な

議題についてはこれで終わりにしたいと思います。

事務局：菊池部会長、ありがとうございました。

それでは、事務局を代表しまして基幹博物館建設担当課長の中原よりご挨拶を申し上げます。

中 原：私からひとこと先生方への御礼の挨拶をさせていただきたいと思います。

第1回が平成29年9月27日だったかと思いますが、概ね2年近くの間、9回ということ、それから、個別にも色々ご相談に乗っていただいておりますので、その間の展示計画、展示設計に係ることにつきまして、協議をしていただきましてありがとうございました。取りあえず本日を持ちまして建築を含め設計が完了することとなりました。

今後は、建築につきましては今年度中の発注に向けて進めて参りたいと考えております。展示製作につきましては、概ね半年遅れの来年度の10月を目途に製作を進めて参りたいというスケジュールになっておりまして、その間にはまた色々とお世話になるのかと思いますけれども、ぜひよろしく願いいたします。

この展示製作につきましては今日で展示専門部会は終了いたしますけれども、いずれにしましても、私どもは素人集団でございますので、今後開館まで菊池先生に展示を中心とした監修をしていただくという事でお願いをした次第でございます。今後も何かと相談させていただくこともあるかと思いますがよろしく願いいたします。

それから、今回の資料は非常に完成図書に近いものでございますので非公開資料ということで取扱いをお願いしたいと思っております。

長い間、本当にありがとうございました。

事務局：以上をもちまして第9回展示専門部会を閉会いたします。本日は大変お疲れ様でした。